

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：33302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25590162

研究課題名(和文) 定住外国人に対する母語教育と文化的アイデンティティ形成に関する社会心理学的研

研究課題名(英文) Social psychological investigation on the education of heritage language and the formation of culultural identity

研究代表者

木村 竜也 (Kimura, Tatsuya)

金沢工業大学・基礎教育部・准教授

研究者番号：20410293

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：大阪府八尾市のベトナム人集住地域において、継承語(母語)教室でのフィールド調査を行った。調査は、ベトナム人を親に持つ青年へのインタビュー調査、継承語教室参加児童の親への質問紙調査とインタビュー調査であった。調査の結果、在日ベトナム人青年の文化的アイデンティティ形成の過程が、「未検討の文化的アイデンティティ」、「文化的アイデンティティの模索」、「文化的アイデンティティの達成」を経ることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In Vietnamese crowding area of Yao, Osaka, we conducted a field survey on Vietnamese people who participate in a heritage language class. The subjects of survey were Vietnamese adolescents and their parents. From interview with them and a questionnaire to them, the process of Vietnamese adolescents' identity formation has three stages, "unexamined cultural identity", "cultural identity search", and "Cultural identity achievement".

研究分野：社会心理学

キーワード：文化的アイデンティティ 異文化適応 継承語 フィールド調査 インタビュー

### 1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、外国にルーツを持つ児童・青年が母語（継承語）<sup>注1</sup>を獲得することが、そのアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼすのか、また外国人児童のアイデンティティ形成の過程に影響する日本社会特有の諸要因を、継承語教室への参与観察と外国人集住地域におけるフィールド調査によって、社会心理学的視点から明らかにすることを目的とする。現在、外国人児童の多くは日本語を第一言語としている。これまで、移住先の主要言語が第一言語となっている移民の子どもが継承語（出身文化の言語）を獲得することで、出身文化と移住先文化のそれぞれに由来する文化的アイデンティティが肯定的に形成されると指摘されている（Lambert, 1967; Cummins, 1996）。また、Berryら（2002）は、出身文化と移住先文化のアイデンティティを肯定的に獲得することで、移住先社会への適応が促進されるとしている。これに従えば、日本における外国人児童に継承語教育を行うことにより、彼らは日本社会にうまく適応できることになる。しかし、この考えは、外国人に対する態度が日本社会と大きく異なる欧米において行われた研究に基づいており、日本に適用する際には、日本人の外国人に対する態度などを考慮する必要がある。本研究課題では、継承語教育と在日外国人児童の文化的アイデンティティ形成との関連を、大阪府八尾市を中心に行った在日コリアンと在日ベトナム人の適応様態の類型化の試み（木村他, 2003, 2004, 2005）に基づき、言語とアイデンティティとの関連性を重視している民族言語的アイデンティティ理論（Giles & Johnson, 1987）言語使用の状況とアイデンティティの表明との関連性を重視した状況的アイデンティティのアプローチ（Clément et al., 2001）異文化適応の戦略（Berry et al., 2002）との関連からのアイデンティティの様態の類型化、民族的アイデンティティ形成に関する3段階モデル（Phinney, 2000）の4つの視点から分析を行う。

注1 研究計画段階では、“母語”という用語を用いていた。本研究課題の対象は、親がベトナム出身であり、日本で生まれた児童・青年たちで、彼（女）らの第一言語は日本語であった。本研究課題でフィールドとした教室では、親の第一言語であるベトナム語を教えるという意味で、「継承語教室」としており、それに倣い、現段階では“継承語”を用いる。

### 文献

Berry, J. W., Poortinga, Y. H., Segall, M. H., & Dasen, P. R. (Eds.) (2002) *Cross-cultural psychology: research and applications* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.

Clément, R., Noels, K. A. & Deneault, B. (2001) Interethnic contact, identity, and psychological adjustment: The mediating and moderating roles of communication. *Journal of Social Issues*, **57**, 559-577.

Cummins, J. (1996) *Negotiating Identities: Education for Empowerment in a Diverse Society*. Ontario, CA: California Association for Bilingual Education.

Giles, H. & Johnson, P. (1987) Ethnolinguistic identity theory: a social psychological approach to language maintenance. *International Journal of Sociology of Language*, **68**, 69-99.

木村竜也・朴洋幸・與久田巖（2003）『在日ベトナム人の適応過程(1) 生活状況の概観』、『在日ベトナム人の適応過程(2) 適応方略の様態』日本心理学会第67回大会発表論文集, 107-108.

木村竜也・與久田巖（2004）『在日ベトナム人の適応過程(3) 日本語能力が十分な個人を対象とした検討』日本心理学会第68回大会発表論文集, 169.

木村竜也・與久田巖（2005）『在日ベトナム人の適応過程(4) 日本語が不十分な個人と十分な個人との比較』日本心理学会第68回大会発表論文集, 170.

Lambert, W. E. (1967) A Social Psychology of Bilingualism. *Journal of Social Issues*, **23**, 91-109.

Phinney, J. S. (2000) Identity formation across cultures: The interaction of personal, societal and historical change. *Human Development*, **43**, 27-31.

### 2. 研究の目的

本研究課題は、外国人児童に対する継承語教室への参与観察と外国人集住地域におけるフィールド調査によって、定住外国人が継承語を学習することによって、肯定的な文化的アイデンティティの獲得が促進されるのかどうかの検証、文化的アイデンティティの形成の過程の解明、肯定的アイデンティティを獲得することが日本社会への適応を促進するかどうかの検証、定住外国人のネットワークの存在やホスト社会の定住外国人に対する態度などの諸要因が、アイデンティティの獲得と適応にどのように影響するのか、それらの諸要因による日本特有の定住外国人の適応様態の5点について、社会心理学的視点から明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 継承語教室の観察

はじめに継承語教室を定期的に観察した。継承語教室は毎週土曜日に開かれていた。主な参加者は小学生で、ベトナム語能力のレベルによってクラス分けがされ、各クラスとも

に 30～60 分程度の学習を行っていた。指導者は、日本在住のベトナム人と日本語とベトナム語の両方を十分なレベルで使用することができる日本人であった。また、継承語教室を卒業した青年が指導の補助者として参加していた。

日本語と観察の目的は、継承語教室の具体的な状況を把握することと、参加児童の教室への参加の積極性の程度を知るためであった。

#### (2) 継承語教室参加児童の保護者への調査

塘 (2005) によると、アイデンティティの形成には、親が子どもに対して持つ発達期待が大きく影響している。在日外国人である保護者がその子どもを継承語教室に通わせている背景には、発達期待が大きく関わっているものと推測される。このことと参加児童の家庭における言語の使用状況などを確認するために、質問紙調査を実施した。

調査は、継承語教室に参加している児童を介して 2014 年 5 月に配付し、6 月～7 月に回収した。25 家族から回答を得た。

調査では、教室参加者の両親に対して、国籍、来日した年、家庭・職場・地域で配偶者または子どもとの会話で使用する言語、継承語教室への期待すること、子どもの継承語教室への参加状況について質問した。日本語の読み書きが十分ではない保護者がいたため、ベトナム語の調査用紙を準備した。これは、日本語で作成したものを、調査の目的と意義を十分に理解している継承語教室のベトナム人指導者に依頼して翻訳したものであった。

#### (3) 継承語教室参加児童の保護者へのインタビュー調査

発達期待と継承語教室に子どもを通わせることとの関連を検討するために、保護者へのインタビュー調査を行った。調査方法としてインタビューを選択したのは、インフォーマントの数が少ないことが予測されたことと、発達期待と子どもがベトナム語を学ぶこととの関連について詳細を知るためである。

インフォーマントは、5 名 (男 2 名、女 3 名) で、調査時期は 2014 年 7 月～8 月であった。調査は、継承語教室を運営している NPO 法人 (特定非営利活動法人トッカビ) の協力を得て行われた。調査時間は、最短で 50 分、最長で 150 分で、半構造化法を用いたインタビューによって実施した。インタビューの内容は、インフォーマントの了解を得て IC レコーダーで録音した。調査者は、インフォーマント 1 人に対して、継承語教室の日本人指導者と通訳として継承語教室のベトナム人指導者が参加した。通訳を要したのは、日本語能力が十分ではないインフォーマントがいたためである。なお、日本人指導者は、十分なベトナム語の能力を有していた。これらの調査者は、継承語教室を通して、イ

ンフォーマントと十分な関係を築いていた。本研究課題代表者は、インフォーマントとの十分な面識がなかったため、インフォーマントがリラックスできることを重視して、調査の場面には同席しなかった。

#### (4) 継承語教室を修了した青年へのインタビュー

継承語教室での学習経験やベトナム文化に関する文化事業と文化的アイデンティティの形成について検討するために、継承語教室を修了した青年にインタビュー調査を実施した。ベトナム文化に関する文化的活動には、たとえばベトナム語での紙芝居作りがあった。

インタビューは、ベトナム人の親を持つ青年 (男 3 名、女 4 名) を対象とした。平均年齢は 14.0 歳 (年齢幅 12～17 歳) で、日本国籍を取得している個人もいた。調査時期は、2014 年 6 月～9 月で、調査に要した時間は、30 分～90 分であった。インタビュー調査は、インフォーマントが十分に慣れ親しんでいる NPO 法人の事務所で行い、調査者はインフォーマントと十分な人間関係を構築している継承語教室の日本人指導者であった。インタビューは半構造化法によって行い、インフォーマントの了解を得て IC レコーダーで録音した。本研究課題代表者は、インフォーマントとの間に人間関係を築くまでにならなかったため、インフォーマントがリラックスできることを重視して、調査の場面には同席しなかった。

#### 文献

塘利枝子 編 (2005) アジアの教科書に見る子ども ナカニシヤ出版

#### 4. 研究成果

##### (1) 文化的アイデンティティ形成の過程<sup>注 2</sup>

本研究課題における調査の一部を用いて、ベトナム人の親を持つ青年の文化的アイデンティティ形成の過程を分析した。

文化的アイデンティティの形成について Phinney (1990) は、Maricic (1966) が提案したアイデンティティ形成の過程をアメリカの少数民族に適用し、3 段階モデルを発表している。それによると、民族的アイデンティティ形成の過程は、自らの民族性について考えることがほとんどなく、主に両親のそれをそのまま受け入れている段階である“未検討の民族的アイデンティティ”、自らの民族性について、何らかの契機から疑問を感じ模索する段階である“民族的アイデンティティの模索”、および自分が属する民族集団に対して否定的なイメージを持たず、自らの民族性について受け入れている段階である“民族的アイデンティティの達成”の 3 段階を経るとされている。

以下に、1 名のインフォーマント (17 歳、女) に注目し、3 段階モデルの各段階に該当

する語りを記述する。なお、Q は調査者、Re はインフォーマント、...は省略、〔 〕内は筆者による補足である。

#### 【未検討の文化的アイデンティティの段階】

Q：〔継承語教室の〕勉強辞めたいと思ったことはない？

Re：ない。ほんまに嫌とか辞めたいと思ったこと〔ない〕。何も思わへんねん。なんでかわからんけど。

Re は、両親から継承語教室に参加させられており、それを「辞めたい」と思ったことはないと言っている。これは、ベトナム出身である両親の民族性を無自覚に受容していることを示していると考えられる。

#### 【文化的アイデンティティの模索】

Re：...〔中学校の時に〕なんで自分日本人じゃないんやろって思った時はあった。

Q：他の友達に具体的になんか言われたことある？

Re：ないねんけど...。もし自分が「ベトナム人で」って言ったら向こう側の接し方が変わってくるんかなって思って、違うルーツを持ってくるから。なんか、日本、その子たちと自分は違うかなって。

これは、Re が中学校の時に持った自らの民族性に関する揺らぎであり、自らのアイデンティティへの模索、試行錯誤の表れではないだろうか。

#### 【文化的アイデンティティの達成】

Q：今は〔ベトナムという〕ルーツのとらえ方はどう？

Re：え、なんか国際教養〔高校の学科〕とかに行っているから、外国が好きなたちが集まっているやん。...だからすごい自分ラッキーやなって思う。〔ベトナム語を話せることが〕ありがたいなあと思っている。

Re がベトナム人であることを知っている同級生たちは、ベトナム語を話せることを評価しており、Re はそれを肯定的に受け取っている。このことは、周囲に受け入れられていることで、Re が自らのベトナム由来の部分を受容していることを示しているといえよう。

以上のことから、Phinney (1990) の3段階モデルが、文化的背景を異にする、在日ベトナム人のアイデンティティ形成にも適用可能であることが示された。

このインフォーマントは、インタビューの

時点では文化的アイデンティティを達成している特徴を示している。しかし、17歳という年齢を考慮すると、その後文化的アイデンティティの模索の段階に戻る可能性もある。

#### (2)今後の課題

本研究課題では、調査が主たる成果となった。今後の課題は以下の通りである。

継承語教室を修了したベトナム人青年へのインタビュー調査の結果を用いて、ベトナム文化に由来する肯定的アイデンティティと継承語の学習や文化的活動との間の関係を明らかにする。

ベトナム人である親を対象とした質問紙調査とインタビュー調査、およびベトナム人青年へのインタビュー調査を用いて、発達期待がアイデンティティ形成に及ぼす影響を検証する。

インタビュー調査の結果を用いて、肯定的な文化的アイデンティティを確立しつつあるベトナム人青年たちが、どのように社会へ適応しているのかを明らかにする。これについては、現時点で得ているインタビュー調査の結果に加えて、追跡調査が必要となる可能性がある。

インタビュー調査の結果を用いて、ベトナム人青年が、友人など周囲の日本人たちからどのように受け入れられているのか、また家族や地域のベトナム人たちに対して持っている態度に注目して、それらと文化的アイデンティティ形成との関連を明らかにする。

ベトナム人青年たちへのインタビュー結果から、日本における定住外国人の文化変容の様態を明らかにする。Berryら(2002)は、出身文化と移住先文化のそれぞれの特徴の獲得の程度から、文化変容の様態を、「統合(integration)」、<sup>1)</sup>「同化(assimilation)」、<sup>2)</sup>「分離(separation)」、<sup>3)</sup>および「周辺化(marginalization)」、<sup>4)</sup>の4つに類型化した。本報告で取り上げたベトナム人青年の語りには、ベトナムというルーツについて、ベトナム語を話せることをありがたいと述べている。この語りから、ベトナム文化に由来する要素を肯定的に捉えていることが推測される。このことは、自らの中にベトナム文化に由来する特徴を肯定的に捉えつつ、日本に適応している統合型であると推測される。これについてさらに詳細な分析が求められる。

注2 Phinney (1990) は“民族的アイデンティティ(ethnic identity)”という用語が用いたが、ここでは、研究課題名に従って“文化的アイデンティティ(cultural identity)”を用いる。この両者は厳密には区別すべきであろうが、民族性と文化は密接に対応していると解釈した。

## 文献

- Berry, J. W., Poortinga, Y. H., Segall, M. H., & Dasen, P. R. (Eds.) (2002) *Cross-cultural psychology: research and applications* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Maricia, J. (1966). Development and validation of ego-Identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- Phinney, J. S. (1990). Ethnic identity in adolescents and adults: Review of research. *Psychological Bulletin*, **8**, 499-514.

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

木村竜也・西田晃一・與久田巖(2015) 在日ベトナム人青年の文化的アイデンティティ形成(1) 日本心理学会 第78回大会

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

特記事項なし

## 6 . 研究組織

(1)研究代表者

木村 竜也 (KIMURA, Tatsuya)  
金沢工業大学・基礎教育部・准教授  
研究者番号：20410293